

【寄稿】 奥田八二先生の人物像

福留, 久大
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/4842498>

出版情報 : 奥田八二日記研究会会報. 9, pp.359-369, 2022-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン :

権利関係 :



【寄稿】

奥田八二先生の人物像

福留 久大

奥田八二先生は、1982年12月に九州大学教授（教養部）を辞職された。福岡県知事選挙への立候補のためであった。私は、1970年4月に九州大学講師（教養部）に採用され10月に助教授に昇進した。したがって、12年8月間だけ同僚だったことになる。この間の同僚としての付き合いで得た奥田先生の人物像を描き出し、出来ればそれを手掛かりにして、「今、奥田八二有りせば」、彼が何を考え、何を悲しみ、何に怒り、如何に動くか、思い出を辿って、検討を試みたいと思う（1983年4月、知事選挙に勝ち抜いて奥田八二知事が誕生した。知事誕生後の奥田さんとも、支援者の一人として、勉強会の構成員として、時折の接触が無かったわけではない。しかし、奥田知事については、秘書室の人々をはじめとして、報告の適任者が複数存在する）。

（一）仲間作りに尽力した人

私の九大赴任後の間もない頃、奥田先生に「自治体の行政白書を作るんだけど、財政分析を手伝ってくれませんか」と声を掛けられた。「私にできる仕事ですか」「大丈夫、大丈夫」という具合にして、教養部からほど遠からぬ福岡県教職員組合関係の宿舎に連れて行かれた。数人の組合員が執筆作業をしている長い机の一角に座を与えられた。福岡県田川市（或いは飯塚市）の財政収支表を渡されて、収入・支出それぞれの特徴を纏めるように指示された。財政力改善策の提案までは求められなかった。そういう簡単な仕事だったので、1時間も掛からずに纏められた。思いもしなかったことだが、謝礼入りの封筒を渡されて、2000円か3000円が入っていた。月給4万余円の頃なので、非常に有難い額だった。しかし、奥田先生自身が行われても簡単に終わるはずの仕事を何故わざわざ私に依頼されたのか、不思議の思いが残った。さらに、私に多少とも財政分析の心得があることをどうして御存知だったのかも不思議だった。

後日に至って判明したことがある。その一。私は経済学担当教師として採用されたので、人事選考は経済学科の川口武彦、小島恒久、原田溥の御三方が中心となって進められた。社会思想史担当の奥田先生は、隣接の社会学科代表として選考委員会に参加されていた。私が選考委員会に提出した応募論文は3本。①「政府短期証券のインフレ効果——」（東京大学経済学研究会『経済学研究』第11号、48～66頁）。大学院博士課程2年の秋から3年の春にかけて準備し、東大闘争＝紛争の激化前の4月11日に書き終えた。政府が食糧証券で調

達して米作農家に支払った米穀買取資金が金融に与える影響、外国為替証券の同様の関係を検討した。②「英国農業の資本主義的構造」（手書き草稿）。博士課程の最終学年になったとき、私の専攻する農業経済学分野の新人募集はどここの大学からも無かった。唯一つ、東北大学経済学部が専攻分野を問わない助手募集を行っていた。博士課程進学後に始めていた英国農業の勉強を急遽助手応募論文にまとめた。19世紀英国に成立した労働者雇用の資本主義的農業経営について、資本家的経営とは言え小農経営を排除するほどの強さは無かったことを明らかにした。③「日本農業一九六〇～六五年——その概略」（東北大学経済学会『年報・経済学』92号、49～79頁。93号、75～97頁）。大学院の大内力演習で進められた「日本経済論」執筆の一環として農業分野を担当していた。東北大学助手就任後に整理して7月17日に東北大学経済学会に投稿した。農家人口、農業生産、農家経済から食糧管理財政を主とする農業政策まで、当時の日本農業の概略の描写に努めた。奥田先生は、①と③を通じて、私に財政学勉強の形跡を認められたのだと思われた。

その二。同じ年の秋、奥田先生から高教組（福岡県立高等学校教職員組合）教育研究集会商業科部会の助言者（後に共同研究者と改称）を要請された。「簿記や会計に素養の無い私には無理ですよ」と断るのに対して、「構わないよ。高教組の皆さんは保守県政に苛め抜かれて寂しいんだよ、九大教員がそばに居るだけでも心強いんだよ」と、奥田先生は答えた。この時の応接を通じて、奥田先生が多く組合の相談相手を務めておられること、その応援要員が不足していることを知り得た。奥田先生自身で簡単に済むはずの自治体の財政分析をわざわざ私に依頼されたのも、私を応援要員の仲間に誘う狙いに依るものだったと得心できたのである。

先の2例が労働者教育運動への仲間入りだとすると、奥田先生の九大在職の最後の年、1982年の「県政の浄化と刷新を志す県民の会」への仲間入りは、市民運動への仲間入りだと言えよう。この場合、奥田先生の仲間作りの作法が良く現れているので、項を改めて具体的に見ることにする。

（二）率先垂範を実行した人

1982年夏季休暇中の7月末近い日の午後のこと、私の研究室に見えた奥田さん（同僚として13年目を迎えていたので、しばらく「さん」付けで呼ぶ）が、小さな紙片を手渡ししながら、「亀井5選阻止のためにこんなことを考えて、小さい集まりを持ちたいんだけど、付き合ってくれませんか」と誘われた。紙片には、次のような趣旨が箇条書きされていた。「百年の計と称して立派過ぎる県庁舎が建設され、桁外れに豪華すぎる知事公舎ができて、亀井県政の腐敗と県民無視は極まっています」。「七月一日に始まった監査請求署名の動きに見られるように、県民の不満と怒りは沸騰しつつあります」。「しかし、怒りの的となる対立候補擁立の動きは今日に至るも見られません」。「どういう形であれ、対立候補擁立の動きを促す声を挙げようではありませんか」。

この日に先立って7月24日に、亀井光福岡県知事は、自民党・農政連・民社党・同盟などの推挙を背に知事5選出馬を正式表明していた。県議会の圧倒的多数の支持を集めた亀井知事の5選について、私などは「5選は嫌だなあ」と思いつつも、無力感に囚われて、具体的行動を起こすことなど念頭にさえ浮かばなかった。それだけに、「奥田さんは偉いものだなあ」と感嘆の思いで、その日の夕刻、はかた会館での6人の集いに参加した。軽くビールで乾杯して、各自好みの丼物で夕食を済ませた。奥田さんから先の箇条書きの趣旨説明があって、各人の活発な意見表明が続いた。なかでも印象深く今も忘れられないのは、森祐行さん（当時工学部助教授）の「やろうじゃないか。神輿を作ってワッショイワッショイやれば人は自然と集まって来るよ」という元気一杯の発言だった。後の流れを見ると森さんの言う通りになったので、その達見に感心したのだった。まとめとして、会の名称を「県政の浄化と刷新を志す県民の会」とすること、8月1日に第1回正式会合を開催すること、第1回会合に趣意書（案）を提出することを決めた。なお、会場費・飲物代・食事代は参加者の割勘であって、この点は後に大きな会合になっても同様だった。参加者に主体者意識を持ってもらう意図が秘められているのだと考えた。

8月1日に博多観光ホテルで開催された第1回会合には三十数名が集まった。自己紹介に続いて各自の情勢報告や意見表明が行われた。好みの対立候補の推挙も試みられた。奥田さんが用意した趣意書案の検討に移り、様々の議論の後に、別添の「もう一人知事候補を早く！ 福岡県民の皆さんに訴えます」という呼びかけ文が確認された。私が注目したのは、「待てども待てども対立候補擁立の動きがきかれない」と嘆いた後に、「民主主義」を強調した次の個所だった。「この状況に手をこまねいているならば、県民の民主主義をテストせんとする天の声に対し、耳をおおうことになります」。「腐敗の蔓延と権力の横暴を抑止し、民主主義と温か味のある県政を蘇生・刷新する機会は今をおいてないし、そのための県民の奮起をおいてないと断定されます」。対立候補が出てこなければ投票権行使という民主主義の第一歩を踏み出すことさえできない。確かに県民民主主義の危機であった。

この小さな「県民の会」は、8月24日に、はかた会館で、第2回の県政を語る会を開き、9月15日、敬老の日に、福岡市西市民センターで、第3回の県政懇談会を開催した。その間に、奥田さんの地方自治研究仲間の岩元和秋さん（当時、九大定年後で西南学院大学教授）の姿も見られるようになった。岩元さんは、後に奥田知事選挙担当の正式組織「清潔な県民本位の県政をつくる会（代表・具島兼三郎）」の代表幹事として縦横の活躍をされることになる。第2回からは、「奥田八二に賭けた快男児」中小企業経営の中西次男さんが常連となった。奥田と中西は同じ兵庫県出身、「奥田さん、お前、出ろよ。俺が担いで絶対に勝たしちやるよ」と独特の播磨弁で奥田さんを口説いていた。奥田さんに誘われた5人の若手研究者から始まった「県民の会」は、徐々に参加者の輪を広げたところで、先の呼びかけ文に基づいて「知事候補擁立に関するお願い」を草して、9月2日に、社会党、共産党、福岡県評には代表が出向いて手渡し、その他の民主団体には郵送した。この間の会合の実務、参加

者との連絡、諸文書の作成、会場の確保、会費の徴収は、奥田さん自身か奥田さんに親しい人が担当した。奥田さんは、自ら手本を示すとともに、手本に添った動きを推進したわけで、文字通り率先垂範の人と言うことが出来た。

率先垂範の仲間作りをもう一つ実見したことがある。奥田先生は、1973年5月20日に九大教養部長に就任、78年8月まで3期務めた。その73年5月下旬の或る日、バケツと雑巾を持った小柄の小父さんが教室の窓に張り巡らされた党派団体のビラをはがし始めた。数年来の大学闘争＝紛争で教室の窓という窓は、幾重にもビラで覆われていた。外観は汚くて内部は暗かった。突然に出現した光景を不思議に思いつつ、よくよく眺めてみると、小柄な小父さんは奥田八二教養部長だった。驚いた事務長以下の職員がやがて清掃作業の応援に加わる。手すきの教員にも仲間入りする人が現れる。こうして教職員による「ビラはぎ」と政治党派による「ビラ張り」の合戦が繰り広げられる。学生団体には広報用の掲示板を用意し、ビラはそこに貼ることを求めた。数か月の間に「ビラはぎ」が勝利、教養部の教室は明るさを取り戻した。率先垂範型仲間作りの見事な実例だった。

奥田先生は、率先垂範型の仲間作りの人だけに、現場の人間が行う率先垂範型の提案を大切にしてくださった。私の場合には、次の例がある。長い間占拠状態が続いていた教養部敷地内の学生会館が、1977年11月に封鎖解除された。改修工事を終えて78年4月の新学期から学生一般に開放されることになった。学生会館運営委員だった私は、新入生が学生会館に馴染みを持てるために、例年は各教室に分かれて行われていた大学生活案内（いわゆるオリエンテーション）を何クラスか一括して学生会館で行う案を学生会館長兼教養部長の奥田先生に提出した。その提案には、厚生補助費を使ってビールとカレーライスを提供することが含まれていた。後の時代ほどには未成年者禁酒が厳しく言われることはなかったけれど、それでもギリギリきわどい案だと自覚はあって、恐る恐る提案したのだった。提案書を一読された奥田先生は、破顔一笑、「面白いじゃないか。この線でやってみようよ」と快諾してくださった。因みに、奥田先生はこの年8月に教養部長を退任された。次年度のオリエンテーションでは、次の教養部長が「未成年者にビールを飲ますのはまずい」との意見で、1回限りの小酒宴に終わってしまった。

（三）『大いなる人間模様』

1920（大正9）年11月1日、兵庫県播磨郡曾佐村（現姫路市）刀出で、父繁之助・母はる恵の間に8番目の男児が生まれる。田磨八二（たなびきはちじ）の誕生である。実家の窮乏ゆえに学力抜群でも上級学校への進学は望みえない。同情した関係者が、1935（昭和10）年1月、赤穂郡那波町（現相生市）の縁戚の奥田家へ養子入りさせて、奥田八二となり、旧制中学校への道が開ける。旧制姫路高校、九州帝国大学を経て学徒出陣、戦後大学に復帰して教授、学生部長、教養部長を歴任した後の1980（昭和55）年に、還暦を迎えた。同年11月1日、『大いなる人間模様——奥田八二先生還暦記念文集』が社会問題研究所から発行さ

れた。そこには、奥田先生が多岐にわたる活動によって多種多様の仲間を作り上げられた様子が如実に示されている。

文集に寄稿したのは、小学校の恩師、大学までの級友旧友が15名、家族や隣人が11名、九大の教員職員が27名、政治家および博物館等建設推進会議や総合地域政策懇話会などの市民運動の仲間が18名、ともに学びともに闘う労働運動の仲間が28名、奥田先生に学びつつ闘う社会主義運動の仲間が24名、学生時代に奥田先生の錬磨を受けた門下生が17名、合計140名。実に多彩な個性的文章が並んでいる。奥田先生についても、「怖い人」と言う人、「優しい人」と言う人に分かれている。ただ一番多い人物評は、「闘う社会主義者」「優れた管理職」「休むことを知らぬ働き蜂・仕事師」「類まれな戦略家」と言えよう。「いや、違います。私にとっての先生は、書画をたしなみ、花木を愛する、心の優しい先生です」という声も含まれている。

私としては、寄稿できなかった人まで考えると、これほど多くの寄稿者を集め得た奥田先生の仲間作りの業績を第一の人物像として挙げたいと考える。したがって、「今、奥田八二有りせば」率先垂範して、理不尽な事柄に抵抗する仲間作り、望ましい事柄を推進する仲間作りに尽力するに違いないと思う。何を理不尽と思い、何を望ましいと考えるか、その時代ごとに項目は変わるとしても、人間の精神の原則に照らして共通に響くものがあるに違いない。

（四）反合理化を徹底した人

「休むことを知らぬ働き蜂・仕事師」の異名をとった奥田先生は、その名に恥じず著作の非常に多い人だった。いま、前記『大いなる人間模様』に記載された60歳までの業績を数えてみる。著書・15点、共著・9点、編著・13点、翻訳・6点、調査報告書・12点、論文・270点、評論・随想・312点の多数に上る。著作の多さがまず驚きだが、その多数の論文や評論を長年月に亘って克明に記録に留める几帳面さにも驚嘆するしかない。

これらの理論的業績のなかで、私が最も注目するのは『体制的合理化と労働運動』（労働旬報社、1969年刊）である。この書物に先立って奥田先生は、『反合理化の理論と戦略』（1965年）、『反合理化闘争要綱』（1967年）、『合理化』（1968年）、『体制的合理化と労働運動——反合理化闘争のために——』（社会問題研究所、1968年）という4冊の類書を発表しておられる。そういう理論的研鑽と実践的経験との集大成となったのが、この『体制的合理化と労働運動』（労働旬報社）である。

「合理」とは、「その考え方（方法）が論理的に正しいと判断されること」「理屈に合っていること」である。しかし「合理化」となると、多少異なる色彩が加わる。「①自分の行動をもっともらしく理由づけること」「②新技術の導入や適正な人員配置などによって作業効率を向上させ、また、経費の削減を図ること」を意味する。②の意味の端的な現れが、しばしば産業労働の現場における「労働者の首切り」「人減らし」となった。その現象が産業労

働の場に限られず、「人減らし」「人間への犠牲の強要」が資本主義体制の全面に及ぶのが、「体制的合理化」であると言えよう。

私が実際に奥田先生に教えられたのは、何かの会議で箱崎キャンパスに出かけて、国道 3 号線から九州大学北門へ入るときだった。そこには高々と陸橋が架けられていて、バスを降りた人々は陸橋を渡ることでなっている。その陸橋を指さして、奥田先生いわく、「車を優先させて人間様を上には押し上げている。逆だよね。本来は、車を上に上げるか、下をくぐらせるべきだよね」。私は、自家用車普及の 1960 年代以前の道路事情をよく知っていた。また、欧米の公共交通調査を数回にわたり行っていた。その知識があって奥田先生の真意を即時に理解できた。自家用車普及以前は、町でも村でも道路は、地域の子供の遊び場でもあった。「くるま」の普及とともに子供たちは遊び場を奪われたのである。自動車の有害作用に早くに気付いた欧米社会では、自動車専用道路を別置するとともに、都市郊外に大型駐車場を用意する。自動車通勤者はそこで降車して、都市中心部へは公共交通の利用を促す配慮が施されていることが少なくない。福岡市内でも、人間の渡る橋が水平方向に架けられていて、自動車はその下の谷の形に掘り下げられた所を走るように工夫された場所が存在している。しかしながら、人間の安全への配慮がうかがえる場合は極めて限られている。多くの場合、自動車の産業企業と利用者への配慮が優先されて、歩行者の生命と安全は犠牲を強要されている。これが体制的合理化の気づきにくい実例である。

そういう体制的合理化に、奥田先生は、理論的にも実践的にも徹底して抵抗を試みた。仲間作りに尽力した「情の人」として奥田先生の人物像を描いた私としては、反合理化に徹底した「理の人」として、奥田先生のいま一つの人物像を挙げたいと考える。したがって、「今、奥田八二有りせば」、彼が何を考え、何を悲しみ、何に怒り、如何に動くか、そういう問いへの答えを見出すのに何の困難も存在しない。

奥田さんは、戦後 70 年以上にわたって、行政改革（或いは構造改革）の美名の下に推し進められた「体制的合理化」としての「公務員減らし」を、第一に悲しみ、怒るに相違ない。特に新型感染症が猛威を振るうなかで、医療関連の公務員が如何に過重労働を強いられているか、痛感していたたまれない思いに駆られるはずである。

しばらく前の頃、英米仏独日の 5 か国を G5 と称した時期があった。その 5 か国の人口千人当たり公務員数を見ると、内閣人事局作成の下表が示す通り、日本が群を抜いて過少である。日本は 36.9 人、英国の 67.8 人、仏国の 90.1 人に対して、2 分の 1 内外という少数である。アメリカの 64.1 人、ドイツの 59.7 人に対しても遠く及ばない。

体制的合理化攻撃の犠牲になって、目下のコロナ禍で苦しんでいる典型例は医療従事者である。大阪府を見ると、保健所陣容の整備が怠慢だったために、保健所員は過労死ラインを超える重労働を重ねながらも対応が追いつかない。その結果、大阪府のコロナ死者数は桁違いの多数に上っている惨状がある。人口百万人当たり死者数を見ると、東京 228 人、愛知 154 人、神奈川 143 人、全国平均 145 人、それに対して大阪 348 人の多数である。この

人口千人当たりの公的部門における職員数の国際比較(未定稿)

2018年(平成30年)度版

			単一主権国家						連邦制国家			
			日本		イギリス		フランス		アメリカ		ドイツ	
			2018年データ		2018年データ		2018年データ		2013年データ		2017年データ	
総人口			126,248 千人		66,436 千人		66,993 千人		315,224 千人		83,042 千人	
単位			千人	人口千人あたり 人	千人	人口千人あたり 人	千人	人口千人あたり 人	千人	人口千人あたり 人	千人	人口千人あたり 人
中央の公的部門			1,280	10.1	2,947	44.4	3,240	48.4	4,139	13.1	1,081	13.0
うち中央 政府 機関	行政職員		346	2.7	356	5.4	1,686	25.2	1,400	4.4	226	2.7
	防衛関係職員		269	2.1	201	3.0	274	4.1	2,107	6.7	236	2.8
	小計		615	4.9	557	8.4	1,960	29.3	3,507	11.1	462	5.6
	うち政府企業等職員		665	5.3	2,390	36.0	1,280	19.1	632	2.0	619	7.5
地方の公的部門			3,380	26.8	1,557	23.4	2,796	41.7	16,062	51.0	3,875	46.7
総計			4,660	36.9	4,504	67.8	6,036	90.1	20,201	64.1	4,956	59.7
うち除く国防			4,391	34.8	4,303	64.8	5,762	86.0	18,093	57.4	4,720	56.8

(注)1. 本資料は、各国の統計データ等を基に便宜上整理したものであり、各国の公務員制度の差異等(中央政府・地方公共団体の事業範囲、政府企業の範囲等)については考慮していない。また政府企業等職員には公務員以外の身分の者も含んでいる場合があり、非常勤職員の計上方法にも差がある。

2. 各国のデータは以下の通り。

- ・日本……「中央の公的部門」欄には、国家公務員定員、独立行政法人及び特殊法人等の職員数の合計を、「地方の公的部門」欄には、地方公務員数及び地方特定独立行政法人の職員数の合計を計上。
- ・イギリス……国立統計局Public Sector Employment UK: March 2019等の資料を使用。
- ・フランス……地方分権・公共サービス省 Rapport annuel sur l'état de la fonction publique ÉDITION 2018等の資料を使用。
- ・アメリカ……人事管理庁 Federal Employment Report Employment and Trend ~June 2013等の資料を使用。
- ・ドイツ……連邦統計局Finanzen und Steuern Personal des öffentlichen Dienstes2017等の資料を使用。

3. 四捨五入の関係で、計欄の数値とその内訳の数値は必ずしも一致しない場合がある。

真相が隠蔽されたままで大阪府知事はコロナ戦線の勇者扱いされて選挙応援にとびまわっている。

流石の奥田さんも気づけなかった事例、私が密かに発掘した体制的合理化の事例を追加してみる。政治資金の追跡調査を忌避したい政治勢力によって、税務公務員の増員は徹底して抑制される。税務職員対警察職員の数的推移を総務省統計局『日本統計年鑑』で拾うことが出来る。1965年：131千人対145千人、1985年：134千人対215千人、2005年：132千

人対 248 千人、2015 年：111 千人対 258 千人である。警察職員が順調に増加しているときに、税務職員の伸びは低く抑えられ、最近では絶対的にさえ減少している。1965 年の国内総生産（GDP）は 34 兆円、2015 年には 532 兆円、半世紀間に 16 倍近くに膨張している。これほどに拡大した日本経済に絶対減少の陣容で立ち向かうのだから、如何に頑張っても税務調査の不徹底は免れない。税金逃れが横行することになる。日本の赤字財政の原因はこんな所にも潜んでいる。

世間には、公務員は失業の心配が無くてうらやましいという声がある。その声に便乗して、公務員攻撃を展開する政治勢力が現れる。その積み重なるの結果がこの少数公務員状況である。奥田さんならば、九大北門で私に声を掛けたように「逆だよ」と言うに違いない。公務員の労働条件を引き下げるのではなくて、民間労働者の労働条件を引き上げることが不可欠である。公務員であれ民間労働者であれ、適切な労働条件が確保されてこそ、労働は「苦役」ではなくて「生き甲斐」にさえ成り得ることが知らなければならない。そのためにはがむしゃらな国際自由競争が野放しにならないように、適切に調整できる労働者の国際連帯運動が組織される必要が欠かせない。奥田さんが労働運動の国際関係について「安保条約と貿易自由化」を重視した背景にそのような事情が認められる。

（五）社会主義を希求した人

奥田先生が社会主義者であったことは誰もが認めるところである。奥田先生は、戦後特別研究生として大学に復帰した。与えられた研究室で川口武彦先生と同室になった。川口先生は、指導教官の田中定教授から、東京から通う向坂逸郎先生の世話役に指名されていた。奥田先生は、川口先生を通じて向坂先生を知り、魅せられて向坂門下生となった。1951 年 5 月、山川均、大内兵衛、向坂逸郎、高橋正雄、そういう人々を中心に社会主義協会が発足した。川口先生も奥田先生も同人となって、活動した。1954 年 6 月、社会主義協会九州支局が設立され、奥田先生が事務局長に就任した。こうして社会主義者・奥田八二の人物像が形成されることになる。

社会主義という言葉は、限りなく規定の困難な用語である。「封建制度」「絶対主義」「自由主義」「資本主義」などの言葉はみな、そうした社会が実際に存在した後か、存在しているときに生まれた。それ故に、何らかの形で現実の一面を表現している。それに反して、「社会主義」という言葉は、より高度の派生語である「共産主義」という言葉とともに、1917 年にロシアで、この言葉にふさわしい社会の建設が企てられる百年近く前に出現している。現実の社会形態を表現していない。従来の社会形態に代る理想社会を表現している。それ故に、様々の人が様々の理想社会を描く。社会主義の定義は無限に分散して、纏まることが限りなく難しい。

ここでは、定義問題に踏み込むことを避けて、奥田先生が社会主義者か否かが問題とされた具体的場面を取り上げてみたい。1969 年夏の九大では、全学封鎖が続いて、奨学生のた

めの前期試験成績の育英会への提出、電算センターの概算要求決定などが出来なくなっていた。この実務上の問題を打開するために、奥田学生部長は、警官導入による封鎖解除という苦渋の決断を下し、同じ思いの教職員の仲間作りを画策する。社会主義は、一般に資本主義の克服形態と考えられていたから、「資本主義＝体制」「社会主義＝反体制」という見地に立つ人が多く存在した。（私も東大の安田講堂への機動隊導入をそういう見地から大学にふさわしくないと考えていた）。そういう人々が、「体制を守護する機動隊」の導入は「反体制の社会主義者」にふさわしくない行動と見なして、奥田先生を「それでも社会主義者か」と強く非難した。

その非難に対する奥田先生の応答が注目に値する。「学生部長だったら定期試験の成績を出さなくて育英会の奨学金がストップするのも仕方がないという方針を、思想から打ち出すわけにはいかない」。「革命で、育英会を踏みつぶすことが出来る情勢ではないはずだ」。

「思想とか理想だけでは実務にはならない。実務をちゃんとやった上で、右か左かを決めよう、実務の筋を壊して理想がどうのこうの言っても始まらない」。「警官導入による封鎖解除は、右か左か、社会主義か否かと関係ない、もっと基本次元の話でなければならない。そこが分からないようでは社会主義者の資格はない」。（『大いなる人間模様』414頁）。

奥田見解の核心は、「実務の筋」「基本次元の話」という所にある、と私は考える。例えば話が分かり易いかも知れない。封建社会であれ資本制社会であれ、親が子供に衣食住を確保して育て上げるのが、人間社会共通の原則である。子供は社会が育てるべきだと理想を語って、この原則的条件を放棄することは一般的に許されない。如何なる社会においても、社会から奨学金の給付ないし貸与を受けた教育機関は、奨学の趣旨に即した勉学の成果を報告する必要がある。この条件を満たさずに奨学金の継続を求めるのは、「実務の筋」を壊すことになる。「基本次元の話」が理解できない子供だということになる。まして社会主義を語る資格もないことになる。奥田見解は、そういう人間社会共通の「実務の筋」「基本次元の話」を理解したうえでこそ、社会主義を語る資格があると述べたいのではないだろうか。「実務の筋」を通すために、「基本次元の話」を実現するために、話し合い説得が不可能ならば、警官導入もやむを得ない、そのように苦しい決断を下すことになったのではないだろうか。

話の抽象度を一段だけ高めてみたい。近代社会は、資本主義経済を下部構造とし、市民社会を上部構造として構成されている。市民社会の社会原則が民主主義（democracy）である。民主主義も曖昧な言葉ではあるが、不十分ではあれ、次の三要素を含むことは確実である。「立憲政治と法の支配」「主権在民」「社会的平等と解釈される社会的正義」。そのように考えて大きな間違いが無いとすれば、三要素をぎりぎりの限界まで追求した地平に見えてくる開口部こそが、社会主義社会へ通ずる道を成す、と言って良いのではないだろうか。

そういうことを念頭に置きつつ、奥田先生について、奥田先生が求めたものについて、『大いなる人間模様』に寄せられた仲間の寸評を拾ってみる。「手作りの社会主義」（執行嵐）。

「真の人間社会創造」（岩元桂）。「広範な地域住民の運動を通して社会変革を目指す地域民

主義」(坂井孝之)。「市民的社会主義者の鑑」(八丁和生)。「来るべき、或いは創るべき体制に向けて、責任をもって、着実に自己の展開を企図している、稀に見る社会主義者」(中村正夫)。実に的を射た興味深い寸評である。

(お集まりの皆様の盛大な討論を病床より祈念申し上げます)。2022年2月23日。

もう一人知事候補を早く！

福岡県民の皆さんに訴えます。

中央・地方とも財政の赤字が深刻化し、一般に不況が長びき、行政改革が叫ばれているさなかに、「百年の計」と称して立派すぎる県庁舎ができ、つづいて桁はずれに豪華な知事公舎が建設され、知事の長期権力の座に安住するおごりと県民生活無視がここにきわまったとの印象を強めております。

折しも知事公舎建設をめぐる公私混同、公費不当支出、知事をとりまく県高級職員の腐敗となれ合いのもとでの職員一般の士気停滞等々の諸問題が一気に噴出し、県下一円はもとより全国的に福岡の次期知事選挙が注目されるに至りました。しかし、こうした諸問題を糾明し、県政浄化の義務を負う六月県議会は、自民党など与党の数の力と、知事とその側近高級職員の逃げに徹した議会運営により、逆に疑惑を深めつつ幕切れとなりました。たまりかねた一部県民が7月1日から「監査請求署名」に立ち上がり、疑惑解明の努力をつづけていることは周知のとおりであります。

このような状況をはさんで、来春の知事選挙に向け亀井現知事は、同じ陣営からの新規出馬の意思の強い桑原氏を強引に退け、公舎建設をめぐる疑惑に対する県議会内外の非難の嵐を巧みにくぐり抜け、7月24日、自民党、農政連、民社党、同盟などの推挙をバックに五選出馬を正式に表明しました。「初心にかえる」との美辞麗句を用いたものの、もし亀井五選が実現すれば、多選の弊として、特に現知事の人格の底から沸き出る弊として、県政の腐敗、耐え難き権力の乱用が一そう強まるであろうことは目にみえています。亀井氏は五選限りを誓約したそうですが、私どもは彼の20年にわたる権力の座は決して許すことはできません。

しかし残念ながら、腐敗と権力の乱用に利益を見出す現知事推挙の諸党派以外からは、待てども待てども対立候補擁立の動きは今日に至るもきかれません。県民の多数が新しい候補の出現を切に待望していることは、例えば「監査請求署名」運動1ヵ月の実践の中からも、十分に察知しうるところです。県民の誰もが、この状況に手をこまねいているならば、県民の民主主義をテストせんとする天の声に対し耳をおおうこととなります。腐敗の蔓延と権力の横暴を抑止し、民主主義と温か味のある県政を蘇生・刷新する機会は今回をおいてないし、そのための県民の奮起をおいてないと断定されます。

私たち有志は、もう待てないという気持で今日ここに集りました。有志の声を集めて、世間に聞える形ある一つの声としたいのです。亀井五選を推挙しない、民主的な、県下どの団体からでも、今直ちに一本化した対抗馬の推挙の動きを表面化してほしい。あるいは私たち有志の数とそのグループを早急に増加させ、討議を重ねる過程で、納得できる候補をみずから見つける努力をしたいと思います。ともかく事を急ごうではありませんか。県政の浄化・刷新のために。亀井五選を阻止し、県政の流れをかえるために。

1982年8月1日

県政の浄化と刷新を志す県民の会